希望学　表紙絵連載終了

東京大学社会科学研究所が、釜石を舞台に行った「希望学プロジェクト」。広報かまいしは、その調査で分かった釜石の「希望」や「可能性」を同研究所からの特別寄稿として24回（平成20年４月～平成22年３月）にわたり連載しました。連載終了後の平成22年４月からは「希望」をキーワードに釜石の風景画が本紙の表紙を飾っています。

この表紙絵も12回目となる今号で終了します。連載終了に当たり、表紙絵作者の末廣昭氏からメッセージが届きましたのでご紹介します。

表紙絵の連載を終えて

「希望学調査」でお世話になりました東京大学社会科学研究所の末廣昭です。この一年間、「広報かまいし」の表紙絵を毎月担当させて頂きました。一年間のお付き合い、本当にありがとうございました。

ことの始まりは、２００８年11月16日に釜石市と社会科学研究所が共同で、「地域における希望の再生」という希望学・釜石調査報告会を行った日の夜、みんなで呑ん兵衛横丁に繰り出して「打ち上げ会」を行った時のことです。お酒大好きのＳさん、Ｎさん、Ｙさんのほか、広報担当のＡさんも同席しておられました。Ａさんが私に「広報かまいしに何か書いてください」と言ったので、「文章より絵か漫画の方がいいです」と、つい答えてしまいました。実際、秋の釜石や橋野の風景は、私の絵心をいたく刺激したからです。

それから一年以上経って、２０１０年４月号から表紙絵を月に１回、担当することになりました。最初に送った絵は「紅葉に染まる釜石の駅の風景」です。「４月号の表紙に秋の風景はないでしょう」ということで、たちまちボツ。代わりに大畑の大桜の写真が届きました。以後、大観音像をバックにした運動会、釜石港にあがる花火、曳き船祭り、元旦の日の出など、送られてきた写真をもとに絵を描きました。結局、私が自分の目で見た風景は、12枚のうち５枚です（どれも秋の釜石です）。機会があればぜひ、春、夏、雪景色の釜石も訪れてみたいと思っています。

今回の絵の大半は、ドイツやイギリスで買い求めた１６０本の色鉛筆と墨を使っています。２０１１年１月号から３月号までは、パステル、水彩絵の具、色鉛筆を使って描きました。１枚に要する時間は８時間くらい。１本の論文を書くよりエネルギーを使います。時には広聴広報課から矢の催促がきて、論文以上の「締め切り地獄」も味わいました。ともあれ、一年間の約束を果たすことができてほっとしています。

社会科学研究所と釜石市のきずなはこれからも大切にしていきたいと思っています。釜石の美しい風景と市民の皆様の温かい心に再び接することができる次の機会を楽しみにしています。

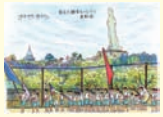
末廣（すえひろ）　昭（あきら）　*Akira Suehiro*

1951年鳥取県生まれ。東京大学社会科学研究所所長・教授。著書『タイ：中進国の模索』『東アジア福祉システムの展望』『キャッチアップ型工業化論：アジア経済の軌跡と展望』など多数。2010年紫綬褒章受章。

［表紙を飾った12枚］

４月

５月


６月

７月

８月

９月

10月

11月

12月

１月

２月

３月

発行／岩手県釜石市　編集／広聴広報課（☎22―2111・内線131）《毎月2回…1日と15日発行》

広報紙は古紙配合紙を使用しています。　PRINTED WITH SOY INK　この広報は大豆油インキで印刷しています。